

<巻頭言>大学知における “アクティブラーニング” の確立に向かって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久富, 健 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/175

巻 頭 言

～大学知における“アクティブラーニング”の確立に向かって～

教養教育部会部長

久富 健

教養教育部会の研究機関である「教養教育リサーチセンター」は、本年度で6年目を迎えました。ここに、先生方の研究発信の場である紀要『The Basis』の第6号を、さらなる研究の充実化を期待しつつ、お届けすることになりました。平成22年度より、『武蔵野BASIS』と名付けた全学共通基礎教育課程をスタートさせ、24年度からは有明キャンパス開設によって、2キャンパス一体型の新しい教育組織体制を築き上げました。そして、各学部の専門課程の「研究所」と連携しつつ、本学全体の研究体制の充実を目標にして、その歩みを進めてきました。

ここ数年、特に2015年は、世界で「人間の生きること」の根源を揺るがす出来事が次々と起こり、これらの激動の波の中で、未来に向かって、「人間の知性とは何か?」ということが真に問われている時代となったのではないのでしょうか。例えば、人文系学問への不要論・反知性主義への潮流・ポピュリズムの台頭などの動向に、思想界での議論も盛んになってきています。教養教育という研究現場にとっても、常に“リベラル・アーツ”という基本理念の原点に立ち戻って、それぞれの学問領域での深化に結び付けていくべきでしょう。再び、以前に引用したことのある、哲学者の言説を想起してみよう：「教養とは、生の難破を防ぐもの、無意味な悲劇に陥ることなく、過度に品格を落とすことなく、生きていくようにさせるところのものである。」(オルテガ・イ・ガセット著『大学の使命』より)

この言説のメッセージを受けとめつつ、大学環境における“知”の在り方を、「大学知」と位置づけるとするならば、今まさに、学生自身たちのアクティブラーニングという地平が注目されてきています。これに関して、去る平成27年3月11日に、教養教育リサーチセンター主催によるFDシンポジウムがおこなわれました。「大学知におけるアクティブラーニング」というテーマのもとで、基調講演・事例発表・パネルディスカッションなど、外部からの参加者も加えて、活気のある議論が展開されました。一つの報告として、本号に積田淳史先生の興味ある事例発表が載っております。今後の教養教育における、主体的・能動的(=アクティブ)な学習への確立に大いに参考になると思われます。

さらに、本号では、長年本学で教鞭を取られた、味村一樹先生が27年度で定年退職されることとなり、特別寄稿として、先生の玉稿をいただき、掲載することができました。「コンピュータ」・「基礎セルフ」等、本学の重要な科目を担当なされ、数々の研究業績を重ねられてきました。学生たちにいつも真摯に向かい合って下さいました。本学に貢献なされた先生、本当にありがとうございました。

本号は今回も、大谷弘先生の帰国報告をはじめ、諸先生方の様々な重要な論考を掲載できたことによって、将来の「教養教育リサーチセンター」の発展に期待が高まっています。今後とも、諸先生方の積極的なご協力のほどをお願いいたします。